

NAJIMA

NAjia=Asia

なしまあ

編集後記
—Accessible Asia—

本号は貿易陶磁特集です。特集のきっかけとなったのは、立教大学アジア地域研究所と日本貿易陶磁研究会の関わりでした。もともと、日本貿易陶磁研究会の年次大会は青山学院大学を会場として開催されていましたが、諸事情により新たな会場を見つける必要に迫られていた時、当時研究所長であった上田信先生の厚意によりアジア地域研究所との共催による研究大会が実現しました。以来、東京での年次大会は立教大学を会場としておこなわれています。従来から日本でも有数の海域交流史の研究拠点となっている立教大学がこのような形で貿易陶磁研究と関わりを持つことができたのはアジア学全体においても大きな意味があったといえるでしょう。東洋史学者にして考古学者であった三上次男が「陶磁の道」と称したように、陶磁貿易は日本を含む東アジアだけでなく、東南アジアから南アジア、さらにはイスラーム世界、地中海世界まで及ぶ汎アジア的な流通ネットワークを形成していました。その意味では、アジア学と陶磁研究は非常に親和性の高い学問分野であるといえます。今回の特集は、インド洋からユーラシア全域におよぶ「陶磁の道」の全てとまではいきませんが、森先生は南シナ海海域(琉球～中国)、荒木先生は東シナ海海域(日本～朝鮮)、坂井先生はインド洋東部海域(東南アジア)、そして私、四日市はインド洋西部海域(ペルシャ湾～イラン)の

海上陶磁貿易に関するそれぞれの研究動向を取り上げ、つなげると東西にわたる「陶磁の道」が浮かび上がるように構成されています。陶磁器を介して見える多様なアジアの姿、そして、多様な文化が混じり合う混沌としたアジアの姿が垣間見えたのではないのでしょうか。今回は正面から取り上げませんが、貿易陶磁研究に深く関わる学問分野に水中考古学があります。近年、中国・韓国・ベトナムなどでは水中考古学の発展と調査・研究の進展がめざましく、従来の研究では見えなかったアジアの姿が明らかにされつつあります。当の日本でも水中考古学は認知されつつありますが、まだまだ研究・教育環境などの面で不十分であることは否めません。14世紀の慶元(現在の寧波)を出航して博多に向かっていた東福寺出資の貿易船が高麗に流されて沈没し、およそ40年前に積み荷を積んだままほぼ当時の姿で海底から引き上げられた「新安沖沈船」のケースがそうであるように、本来、水中考古学は国の枠組みを超えて研究されるべき分野です。その意味では今後も水中考古学は注目され続けるでしょう。立教大学としても陶磁器研究と並んで積極的に関わってゆくべきかもしれません。いつかアジア各地の水中考古学の成果と現状を『なしまあ』でも取り上げることができればと考えています。(四日市康博)

世界のおじさん・おばさん⑩

ペルシャ湾の奥に位置するイラン・フーゼスターン州の古都アーバーダーン。そこにおじさんの家はあった。私の研究者仲間の父親だ。「美味しいお菓子だろう？」イランでは客が来るとお菓子を出してもてなす。彼は近所の公園への散歩に僕を誘ってくれた。「きれいな公園だろう？」出会ったばかりなのに、不思議と緊張感はない。おじさんは不意にどこにでもある食料雑貨屋で立ち止まった。「アイスクリーム食べるか？」彼は小さな息子に買い与えるかのように、僕にアイスクリームを買ってくれた。(四日市康博)



なしまあ

親しみ深きアジア
—Accessible Asia—



特集
貿易陶磁研究の世界

「陶磁の道」を調査する—ペルシャ湾に中国陶磁を求めて／四日市康博
アジア南東海域の貿易陶磁／坂井隆
中国から琉球、陶磁の道を探る／森達也
朝鮮陶磁の日本海沿岸地域への流入経路／荒木和憲

高橋孝治 倉田徹 久礼克季 豊田由貴夫 細井尚子 弘末雅士
VAN ITTERBEECK Joost 諫早庸一 大河内博 宇井志緒利 四日市康博

なしまあ -Accessible Asia- 10号

●発行／2020年3月31日 ●編集／立教大学アジア地域研究所 四日市康博 野中健一
●制作／たまさや ●デザイン／犬山ハリコ ●印刷／株式会社シュービ ●ISSN 2188-8213



立教大学アジア地域研究所 〒171-8501 東京都豊島区西池袋 3-34-1

Tel・Fax: 03-3985-2581 E-mail: ajiken@rikkyo.ac.jp https://www.rikkyo.ac.jp/research/institute/caas/

10

No.10 2020

特集／貿易陶磁研究の世界

「陶磁の道」を調査する—ペルシャ湾に中国陶磁を求めて／四日市康博	4
アジア南東海域の貿易陶磁／坂井隆	6
中国から琉球、陶磁の道を探る／森達也	8
朝鮮陶磁の日本海沿岸地域への流入経路／荒木和憲	10

論考

中国・日本旅順関東法院旧跡訪問記／高橋孝治	12
-----------------------	----

コラム

Do you hear the people sing? デモの街・香港の声を聞く／倉田徹	15
---	----

海域学コレクション

『リユーペ外国図コレクション』『植民省所蔵図』マイクロ資料について／久礼克季	16
--	----

教壇から

「開発と文化」日常の視点から開発を考える／豊田由貴夫	18
「大衆演劇の世界」「演芸の世界」(全学共通科目)／細井尚子	19

アジアの本棚-Book review-

『マラッカ海峡物語 ペナン島に見る民族共生の歴史』／弘末雅士	20
L'Animal Nourricier [Animals Nurturing Humans]／VAN ITTERBEECK Joost	21

研究員紹介

もうひとつの「天文対話」—モンゴル帝国期ユーラシアにおける2つの天文学の邂逅—／諫早 庸一	22
ブルネイ・ダルサラームより／大河内博	23

フィールドから

カンボジアの歴史とキリスト教会を巡る／宇井志緒利	24
--------------------------	----

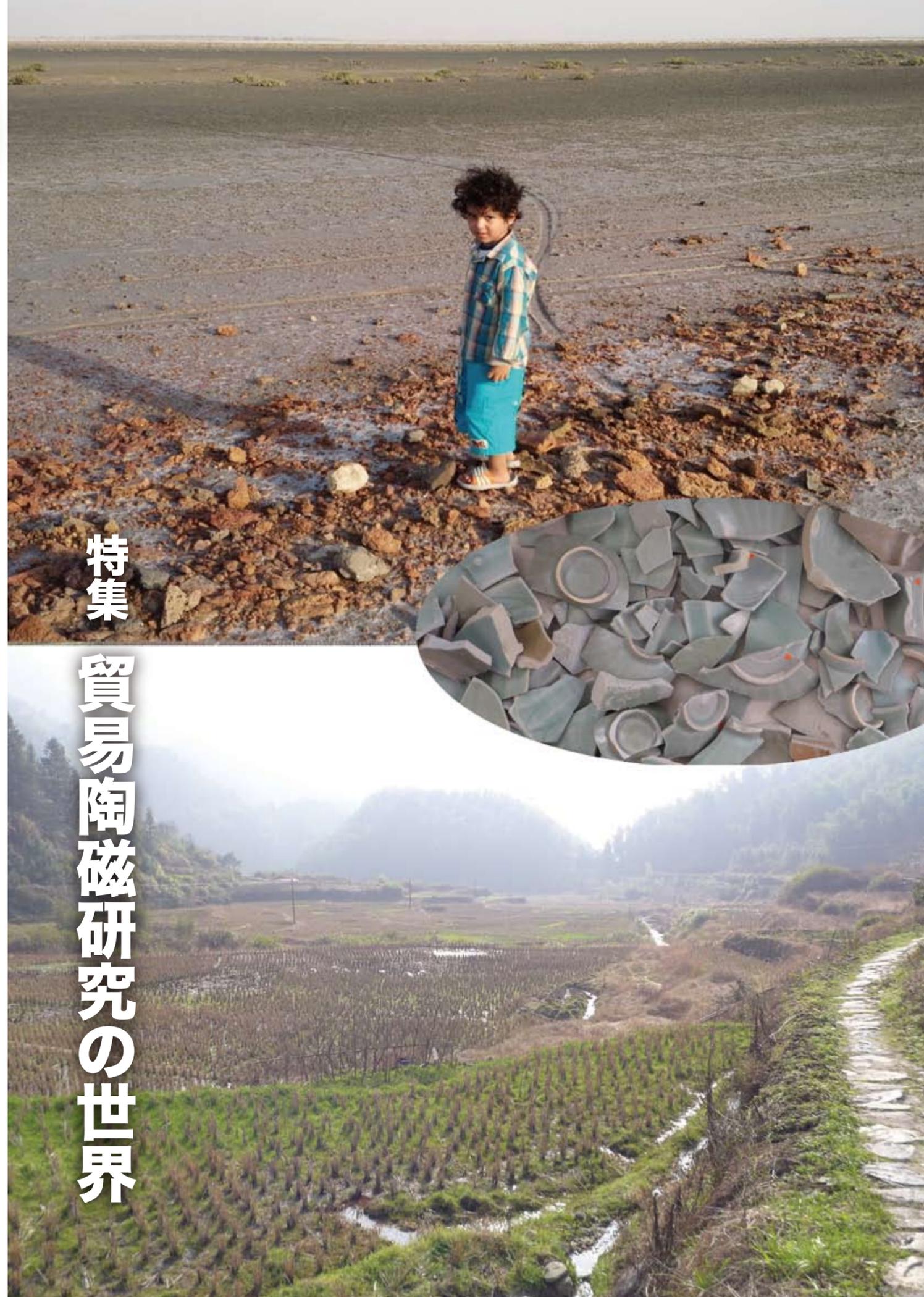
アジア的・レストラン探訪

福清菜館 福来園／四日市康博	27
編集後記／四日市康博	28
世界のおじさん・おばさん／四日市康博	28

●「なじまあ」とは

身近なアジア、親しみあるアジア、行きやすいアジア。「親しみ深い」というコンセプトを一言でいうと「なじみ」。「アジアになじむ」という意味をこめて、日本語で「なじまあ」というタイトルを思いつきました。NAJIMIにASIAをかけています。「～まあ」のいい方で「アジアになじもうよ」という勧誘の意も表しています。

表紙写真／インドネシア・サムドラ王宮跡の子供たち／撮影：四日市康博
スマトラ島ロークスマウエから数キロ離れたところにサムドラ王国の跡地がある。王宮の丘跡地の前にはエビ養殖池には大量の中国陶磁片や土器片が散布している。
右ページ写真／(上段)イランの古ホルムズ王国遺跡。700年前の町並みが遺構としてそのまま残り、中国陶磁片が大量に散布している。
(中段)古ホルムズ王国遺跡から出土した龍泉窯青磁片。すべて南宋～元代のもの。
(下段)中国・浙江省の龍泉市大窯村。世界中に流通した龍泉窯青磁はここで製作された。



特集

貿易陶磁研究の世界

「陶磁の道」を調査する ペルシャ湾に中国陶磁を求めて

文・写真／四日市康博

よっかいち・やすひろ／立教大学文学部史学科准教授・アジア地域研究所・日本貿易陶磁研究会世話人
2004年早稲田大学大学院文学研究科博士課程単位取得退学、博士(文学)。九州大学人文科学研究専任講師を経て2018年より現職。専門はモンゴル帝国期ユーラシア交流史・海域アジア交流史。著書『モノから見た海域アジア史—モンゴル〜宋元時代のアジアと日本の交流』(編著、九州大学出版会)；“Maritime Asia,” *Cambridge History of the Mongol Empire* (Cambridge UP, 近刊)など。



写真1／シーラーズにてアリー＝バフラーニープール教授の妻マルヤムの実家の朝食に招かれる。イランでは朝食・昼食・夕食とも絨毯を敷いて一家全員で客と食事をするのが伝統的なスタイル。(2012年)

貿易陶磁とは

貿易陶磁とは聞き慣れない言葉かもしれないが、貿易品として流通した陶磁器を指す。日本各地の遺跡から出土する中国陶磁器の多くは貿易品として日本にもたらされたものである。それら貿易陶磁は日本だけでなく、東南アジア、インド、中東、ア

フリカまでもたらされ、世界中の生活文化に影響を与えた。一見同じように見える陶磁器であっても、みな同質というわけではない。胎土や焼成の際の燃料や温度・湿度によってその様相は変わってくる。そのため、考古学や歴史学において、陶磁器は様々な情報を得るための極めて有力な手掛かりとなり得るのである。

ペルシャ湾の「陶磁の道」調査

2002年に初めてイランを訪れて以来、ここ数十年にわたってペルシャ湾とイランを結ぶキャラバンルートや港湾都市にもたらされた中国陶磁を追っ

ている。「陶磁の道」とは、著名な歴史研究者にして陶磁器研究者でもあった三上次男が唱えた言葉であるが、まさにインド洋を越えて数多くの中国陶磁器がイランにもたらされた。日本よりも中国から遙かに離れたイランにおいて日本に匹敵する量の中国陶磁片が見られるのだから驚きだ。2007年以降は、あらゆる陶磁器にも通曉した専門家の森達也教授(沖縄県立芸術大学)、東西交流史を研究して自らもペルシャ湾に出自を持つアリー＝バフラーニープール教授(シャヒードチャムラン大学)と共同で調査を続けている。調査に際してはこれまで様々な困難があった。キーシュ島からシーラーズに至るキャラバンルートの調査では荒地の真ん中で夜中に車がスタックしてしまったが、たまたま通りかかった村人に救出してもらい、村でもてなしを受けた。また、ほとんど砂漠のようなオフロードを走行中に道



写真2／調査に同行したバフラーニープール教授一家(2016年)



写真3／シーラーズにて表採資料の整理・分類と撮影。陶磁片資料は日本へ持ち帰らず、ミーラーセ＝ファルハンギー(イラン文化遺産保護局)などに委託するため、早急に整理・分類・撮影をおこなわなければならない。(2018年、撮影：アリー＝バフラーニープール)



写真4／ティアーブ村でおこなわれる精霊憑依の儀式(2016年)



写真5／ミーナーブ調査にて。ホルムズ王国が現在のホルムズ島(新ホルムズ)に遷都する以前はミーナーブ川流域に古王国の都があったことをマルコ＝ポーロが伝えているが、その場所は長らく不明であった。20世紀後半にイギリスのウィリアムソンがミーナーブ川流域の調査をおこない、100以上の遺跡を発見したものの、成果を公表する前に夭折してしまった。我々の調査では古ホルムズ王国に関わる数十の遺跡における中国陶磁片の分布から古ホルムズ王国の実態が次第に明らかになりつつある。(2007年、撮影：森達也)

を失い、あわや野宿というところで何とか道路に復帰できて九死に一生を得たこともあった。さらには、軍の監視施設に連行され、アリー夫妻が数時間の尋問を受けてようやく解放されたこともあった。一方で、地元の漁師や老人の案内によりシュテイン＝アウレール(オーレル＝スタイン)など先学たちが報告していない新発見の遺跡で中国陶磁片を確認したり、最近ではイスラーム最大の旅行家、イブン＝バットゥータも訪れたというアーバーダーン遺跡で多量の中国陶磁片の散布を新たに確認したりと大きな成果も出ている。他方、現地のアフリカ系住民の集落で夜通しおこなわれる精霊憑依の儀式に参加したり、海中から浮上したとの伝承を持つ漁師の信仰を集める聖域の島に上陸したりと、かなり貴重な経験もさせてもらった。

陶磁器研究と歴史研究

上述の調査の成果の一部は、歴史研究者ながら私も末席に加わらせていただいている日本貿易陶磁研究会やその他の学会などで発表してきた。近年、日本貿易陶磁研究会は立教大学アジア地域研究所と共催で研究大会を開催しているが、もともと「陶磁の道」を提唱した三上

次男が発足に関わっている。三上次男といえ、私の中では女真・モンゴルの研究者としてのイメージが強かったのだが、陶磁器研究におけるその足跡の巨大さは知れば知るほどに驚かされる。いつの日か、私も三上次男のように陶磁の道に股にかけて活躍する歴史研究者になることができればと密かに想っている。



写真6／ギール旧市街遺跡の大モスク跡で確認された龍泉窯青磁片。モンゴルが支配していた元朝期にもたらされたもの。インド洋を渡って来た後、シーラーズに至るキャラバンルートで運ばれてきたと考えられる。(2016年)

アジア南東海域の貿易陶磁

文・写真／坂井 隆

さかい・たかし 国立台湾大学芸術史研究所(大学院)非常勤教授
2002年上智大学外国語学研究科で博士(地域研究)取得。2019年まで国立台湾大学で常勤教授。専門は東南アジア考古学・アジア海上交流史。著書に『インドネシアの王都出土の肥前陶磁—トロウラン遺跡ほか』(共著、雄山閣 2017年)など。



写真1 / コーカオ島(左)と本土を分ける水道



写真2 / タンルウィン川本流とアタラン川(上右)手前の森が港跡



写真3 / トロウランのバジャン・ラトゥ寺院門跡



写真5 / コーカオ島出土のベルシャ青釉壺片



写真4 / パサール・イカンからのバタヴィア旧港



写真6 / スロソワン王宮跡からのバンテン大モスク

インドと中国を繋ぐ海の大動脈、南シナ海とベンガル湾。両者はマレー半島とインドネシア群島で隔たれるが、それを越えるルートは古来陶磁の道となっていた。

ベルシャ青釉壺—コーカオ島

マレー半島北側は、タイ南部のクラ地帯となる。狭い部分で50キロのこの地域こそが、インド洋世界と南シナ海海域の接点となった陸地である。特にベンガル湾側のコーカオ島は本土とは水道で離れているだけだが、幅600メートルほどの入り口が天然の港の役割を果たしていた(写真1)。水道に面したトゥントゥツ遺跡ではヒンドゥー寺院跡等が発見され、現在でも無数の陶磁片が地上に散らばっている。大多数は中国の越窯青磁・長沙窯多彩釉や北方白磁等の9-10世紀の初期貿易陶磁で、鮮やかなベルシャ青釉壺片(写真5)も数多く見られる。

ほとんど同じ陶磁片が南シナ海側のフォー岬でも発見されたことを、ホー・チュイメイは1990年代前半に日本貿易陶磁研究会で発表した。近くのチャイヤーは初期海洋国家のシュリーヴィジャヤの拠点の一つで、両岸を結ぶ100キロ強の陸路こそが謎に満ちたこの大乘仏教王国の重要な交易ルートだった。

青磁輸出の港—モッタマ

現在の東南アジアで唯一インド洋に面したミャンマーでは、かつてマルタバンと呼ばれた南部の良港モッタマが賑わった。タンルウィン川の河口に近いここは、モン人の古都の一つである。彼らはミャンマーの最初の仏教民族だが、ここで合流する支流のアタラン川を通じてタイ北部のランナーに達する意味が大きい(写真2)。ランナーの北東はメコン川中流で、そこから雲南は間近である。

この後背陸路は重要な陶磁器輸出ルートで、その代表が11~15世紀の龍泉窯青磁だった。浙江省産の龍泉窯最大の輸出港は、現在の寧波である。しかし長江を経て中国内陸へも相当量が運ばれ、その一部は雲南からモッタマにもたらされた可能性は大きい。アラビア語やトルコ語では、青磁を「マルタバン陶磁」と呼んでいた。

龍泉窯青磁の輸出が減少すると、代替品のランナー青磁さらにモン青磁がここからインド洋世界に運ばれた。またモッタマ周辺で作られた直径1メートル近い黒釉白彩大壺は、船内での飲料水容器として各民族の貿易船の必需品となった。

元青花とベトナム陶磁—トロウラン

インドネシアの中心ジャワ島の文化は、古代のヒンドゥー・仏教から中世以降のイスラームも含めてインドとの関係が深い。ジャワ最後のヒンドゥー王朝マジャパイト

は13世紀末のジャワへの元寇を機に誕生し、早くからインド洋と南シナ海での貿易に影響力を及ぼしていた。王都トロウラン遺跡(写真3)は海岸から60キロ以上内陸だが河川交通網で海上ルートと深く繋がり、多彩な陶磁片が100年に達する調査で発見され続けている。

特に興味深いのは、中国の陶磁器文化を大きく変えた元青花の大量発見である。主に東南アジア向けと言われる粗製品だけでなく、トルコのトプカプ宮殿やイランのアルダビール廟に残された優良品を多く含んでいる。これは青花誕生とほぼ同時代の、デリーのフィーローズシャー宮殿跡出土状態に近い。

さらに同じ時代に北部ベトナム産陶磁器がすでに運ばれ、15世紀には最大割合を占めて各種置物や壁タイルを含むその最大の輸出先になった。同時に量的に少ないが、ベルシャ青釉タイルも運ばれていた。

その状態は、オルソイ・デ・フリーネスから日本貿易陶磁研究会の創設者三上次男に至る世界各地の研究者たちの目を惹きつけさせた。

近世の貿易拠点—バンテンとバタヴィア

ヨーロッパ人の植民地活動が始まった16世紀以降、貿易覇権を巡る複雑な争いが頻繁に起きた。僅か90キロしか離れていないジャワ島西部のイスラーム王国バンテン王都とオランダ東インド会社本拠のバタヴィア(現在のジャカルタ)は、奇妙な補完関係で200年ほど共存した。

バタヴィア旧港地区パサール・イカン(写真4)には18世紀代の東インド会社大型木造倉庫が多く保存されているが、運河改修で大量の陶磁片が1980年に発見された。これはインドネシアで最初の陶磁器考古学調査で、三上次男は成果に大きな関心をもち日本貿易陶磁研究会でも報告された。

重要な発見に二彩手刷毛目唐津がある。明清交代の政治的混乱で中国磁器の輸出が止まり、代替品として日本の肥前磁器(伊万里)の急速な輸出がオランダ船と唐船によってなされた。バタヴィアで肥前磁器が出るのは当然だが、なぜか1種類の肥前陶器(唐津)が含まれていた。それは以後各地で確認され続けている。

バンテン王都バンテン・ラーマ遺跡(写真6)ではさらに大量の陶磁片が発見され、トロウランに引き続く時代の陶磁貿易を良く示している。興味深いのはやはり少数のベルシャ陶器で、最たるものが16世紀代の初期サファヴィー白釉藍彩皿の存在だった。

この地域で発見された陶磁片は、二つの海域世界を結びつけた人々の歩みを表してきた。それは日本貿易陶磁研究会の長年に渡る研究活動と深く関わっていた。

中国から琉球、陶磁の道を探る

文・写真／森 達也

もり・たつや／沖縄県立芸術大学美術工芸学部全学教育センター教授、日本貿易陶磁研究会世話人、早稲田大学にて学士、修士、金沢大学にて博士(文学)学位取得。日野市教育委員会学芸員、愛知県陶磁美術館学芸員、学芸課長を経て2015年より現職。専門は陶磁考古学、貿易陶磁研究、陶磁史。著書『中国青瓷の研究―編年と流通―』(汲古書院、2015年)ほか。



写真1 / 馬祖列島 南竿島遠景

沖縄では11世紀頃から中国陶磁の搬入が始まり、1372年に琉球中山国が中国・明王朝(1368~1644年)に朝貢を開始した頃から15世紀にかけて、膨大な量の陶磁器が輸入された。

琉球王国時代の中国から那覇への航路については、嘉靖13年(1534)に琉球に赴いた冊封正使・陳侃が著した『使琉球録』に、福州出航→台湾北部を視認→尖閣諸島を視認→久米島目視→那覇到着というルートの記載があり、それ以降の冊封使の記録でも同様の航路が使われたことが確認できるが、それより前の14世紀末から15世紀にも同様の航路が使われたどうかは文献資料からは明らかでない。このことを考古学的に明らかにするため、筆者は近年、このルート上にある馬祖列島、台湾北部と久米島、及びこのルートより南に位置する与那国島、西

表島、石垣島、宮古島など先島諸島の遺跡と出土遺物の調査を行っているが、ここでは特に馬祖列島の調査について紹介してみたい。

馬祖列島は、福州沖に浮かぶ台湾管轄の島々で、北竿、南竿、西莒、東莒、亮島、西引、東引などからなる。明時代後期から清時代に琉球に派遣された冊封使が著した一連の記録(冊封使録)に福州から台湾北部方向に向かう途中でこれらの島を指標としたことが記載されており、琉球に向かう船は福州の外港である梅花や五虎を出航した後、馬祖列島の島々を指標に東方に針路を取り、最も東に位置する東引島(東沙)を視認すると南西方向に針路を変え、台湾の島影を見ると再び東北東に針路を取って尖閣諸島の島や岩礁を指標としながら久米島を目指したことがわかる。また、沖縄県立博物

館が所蔵する『那覇港福州航路図』(19世紀頃)にも北竿島と南竿島の間を通る航路が示されている。筆者は2019年5月から台湾・中央研究院歴史語言研究所、成功大学考古研究所と共同で馬祖列島の考古学調査を実施しており、亮島を除く主要な島々の海岸部や陸上の遺跡の分布調査を行った。南竿島の馬祖港、北竿島の坂里村遺跡、東莒島の蔡園裡遺跡などで中国陶磁を数多く表採して産地や生産時期の確認を行った結果、この地域では9世紀から10世紀頃に浙江東南部や福州周辺で生産された越州窯系の青磁が搬入され、宋・元時代の11世紀頃から14世紀前半には大量の福建の白磁・青磁と少量の龍泉窯青磁が受容されたことが明らかとなった。明時代に入ると中国陶磁の搬入は激減し、明時代後期になると景德鎮青花や福建南部の漳州



(左上) 写真2 / 玉縁白磁碗
蔡園裡遺跡出土 馬祖民俗博物館
(上右) 写真3 / 南竿島馬祖港 表採遺物



写真4 / 踏査風景 東莒島 蔡園裡遺跡の海岸地域

窯青花がわずかに見られるようになるが、清時代前期には再び激減し、18世紀から19世紀になると福建の徳化窯系の青花磁器と少量の景德鎮青花磁器が見られる。この二つの激減期は明と清の海禁時期に島の住民が大陸に移住させられたという文献記録に符合している。

興味深いのは宋元時代磁器の分布状況で、日本や沖縄で出土するのと同じ11世紀後半から12世紀前半の玉縁白磁碗や端反白磁碗が数多く表採されたほか、沖縄でピロースクタイプ、今帰仁タイプと

呼ばれる元時代の福建製磁器碗も数多い。これらの磁器は福州に注ぐ閩江流域や福州付近の磁器産地で生産されたもので、その流通圏が馬祖列島を経て台湾北部にまで達していたことが明らかとなった。また、これらの地域では碗や皿などの小形製品だけでなく、水注や瓶など大形磁器の流通も認められている。これまでの説では、八重山諸島や沖縄諸島で出土する宋時代の玉縁白磁碗と端反白磁碗などは九州から運ばれ、元時代のピロースクタイプと今帰仁タイプは福州から先島経

由で運ばれたとされてきた。しかし、前者の分布圏が台湾北部まで達していた状況と八重山の西表島と石垣島で沖縄本島では全く出土しない水注や瓶などの宋時代の大型磁器が出土していることなどから、先島で出土する宋時代の中国磁器はすべてが九州経由で運ばれたものではなく、福州から馬祖列島・台湾北部を経由して運ばれたものが含まれている可能性を考える必要があるだろう。

朝鮮陶磁の日本海沿岸地域への流入経路

文・写真／荒木和憲

あらかずのり／国立歴史民俗博物館准教授・日本貿易陶磁研究会世話人
2006年九州大学大学院人文科学府博士後期課程修了、博士(文学)。九州国立博物館主任研究員などを経て2015年より現職。
専門は日本中世史・東アジア交流史。著書『中世対馬宗氏領国と朝鮮』(山川出版社)、『対馬宗氏の中世史』(吉川弘文館)など。



(上)写真2／益田川の河口部
左岸(西側)に中須東原・西原遺跡がひろがる。

(左)写真1／中須東原遺跡出土の朝鮮陶磁(15-16世紀)
(益田市教育委員会蔵)

はじめに

日本海側に分布する中世遺跡では朝鮮陶磁の出土例が多い。とりわけ島根県益田市の中須東原・西原遺跡では、船着場の遺構と大量の朝鮮陶磁が出土した。朝鮮と益田をむすぶ物流が存在したわけだが、その流入経路はどのようなものだったのだろうか。

『海東諸国紀』の陥穽

15～16世紀は日本列島と朝鮮半島をまたぐ経済交流が活性化した時代である。1471年、朝鮮の申叔舟は、対日外交のマニュアルとして『海東諸国紀』(以下『海東』)を著した。彼は外交官として対馬を訪れた経験を持ち、領議政(首相)兼礼曹判書(外相)の要職についていた。

『海東』は日本中世社会に関する重要史料であるが、虚実ないまぜの情報を含むという危うさもはらむ。『海東』の骨格をなす

『日本国紀』には、室町幕府と西日本の守護・国人などの名前や、彼らが朝鮮に遣使した実績などを列記する。「山陰道八州」条によると、国別の通交者数は、石見5名、出雲3名、丹後・但馬・伯耆・隠岐は各1名であり、石見の領主たちが突出して朝鮮との貿易を行っていたかにみえる。

ところが、彼らはいずれも実在の人物ではなく、対馬守護の宗氏が貿易の権益を拡大するために創作した架空の人物である。たとえば、「石見州益田守藤原朝臣久直」なる人物は実在しない。益田を支配し、藤原を本姓とする領主、すなわち益田氏をモデルにした架空の人物なのである。

したがって、『海東』を根拠として、日本海沿岸地域の領主たちが朝鮮に遣使して貿易を行っていたとみることはできないのだが、別の見方をすれば、彼らの支配下にある港湾が対馬と本州とをつなぐ海上交通の要衝であるため、対馬宗氏が彼ら

の存在を強く意識していたことになる。とりわけ石見・出雲の港湾が重要だったのではないかと。

「南路」と「北路」

対馬と日本海沿岸地域はどのような海上交通路で接続するのだろうか。よく知られている史料としては、1474年に対馬守護の宗貞国が家臣の塩津留氏に発した免税許可書がある(「峯郡」文明6年8月9日宗貞国書下写)。その免税項目のひとつに「陸地(九州)・石見・若狭・高麗(朝鮮)への大小船の公事」がみえる。塩津留氏は朝鮮—対馬—九州—石見—若狭間を往来する廻船を経営していたのである。

1476年、対馬を訪問した朝鮮使節の金自貞は、壱岐の三郎太郎と会い、通信使の船を京都方面まで派遣できるか否かを尋ねた。すると三郎太郎は、「南路は兵乱のため無秩序な状態です。必ず海賊に



写真3／『海東諸国紀』所収の「日本国西海道九州之図」と「日本本国之図」(左半) (東京大学史料編纂所蔵)



写真4／「日本国西海道九州之図」(部分拡大は筆者による)
博多を起点として「赤間関」(長門下関)、「出雲州」、「岐世渡浦」(岐瀬戸浦)、「下松浦」(肥前)を結ぶ航路を白線で示す。

襲撃されるでしょう。もし壱岐から北海を経由して行けば、風任せで8日もすれば若狭に到達できるでしょう」「博多と壱岐の商人は、みなこの海路を経由して往來しています」と回答している(『成宗実録』7年7月丁卯条)。

1479年、通信使の一員である金訥が宗貞国に京都までの護送を求めたところ、「対馬から本国(本州)に向かうには南路があります。北路の場合は、海を越えること10日余りで石見州に直接停泊します。南路の場合は、壱岐・博多の二海を渡り、さらに沿海を30日余り進めば石見州に到達します」との回答を得ている(『顔楽堂集』巻4「遣行」)。

このように、対馬・壱岐から玄界灘の沖合(「北海」)を横断して日本海側へと接続する「北路」が存在したのである。

地図に描かれた「北路」

『海東』は「日本本国之図」「日本国西海道九州之図」などの地図も収録する。海域には航路が白線で示されていて、港湾都市や沖合の島々をむすぶ複数の航路がどのように接続していたのかわかる。

「九州之図」をみると、博多を起点として、「藍島」(相島)の西方沖、「於路」(小呂島)の東方沖、「小崎於島」(沖ノ島)の北方沖を通過する航路を示し、「指出雲州」(出雲州へ向かう)と注記する。これはまさしく「北路」の玄界灘側を示すものである。

一方、「本国之図」は、「長門州」の北方沖から「丹後州」にいたる東西航路を示す。その西端に「指筑前州博多」とあり、「九州之図」の「指出雲州」と接続することがわかる。つまり、「本国之図」は「北路」の日本海側を示しているのである。その航路をたどると、長門の「責任浦」(肥中)、石見の「長浜浦」、出雲の「大河」(神戸川)、伯耆の「湖」(東郷池)、丹後の「大河」(円山川)と東部の港湾(宮津付近)を寄港地として記す。丹後の終着港のすぐ東側には若狭の「小浜浦」も記す。あくまで航路のモデルを示したものであって、これらに代表される港湾を適宜経由しながら航海したというのが実態だろう。

おわりに

対馬と日本海沿岸地域をむすぶ海上交通路として、南路だけでなく、北路も存在したこと、そして北路を利用すれば石見・若狭へも直航できたらいいことがみえてきた。ただし、数昼夜にわたって海上に浮かびつづけるというのは、和船(荷船)の航海方法としては違和感が拭えないし、そうした危険を冒してまで、日用雑器レベルの朝鮮陶磁を商品として輸送するのかという疑問もわく。朝鮮陶磁を益田の船着場のような集散地まで運んだのは何者だったのか、そこからどのような経路を伝って広範囲に流通したのかなど、疑問は増えるばかりだが、まずは中世の海上交通の実態を明らかにしていきたいと考えている。



図1／西日本海沿岸の主要港湾(カシミール3Dのスーパー地図に加筆)
『海東諸国紀』『日本国紀』所載の領主の本拠地、および付図所載の港湾等を示した(推定を含む)。

中国・日本旅順関東法院旧跡訪問記

文・写真／高橋孝治

1. はじめに

1-1. 日本の植民地・関東州

かつて日本は多くの地域に植民地を持っていた¹⁾。現在の中華人民共和国(以下「中国」という)遼寧省大連市の一部(普蘭店区、金州区、甘井子区および旅順口区など)は、法律上1905年12月22日から1945年8月15日まで関東州という名称の日本の植民地であった²⁾。ここでいう関東とは、万里の長城の一部を構成する山海関(現在の河北省秦皇島市山海関区)の東側という意味である(大連市中級人民法院課題組 2017:p.10)。本稿は、中国大連市旅順口区に現存し、2006年5月より「日本旅順関東法院旧跡」という関東州の司法に関する資料館となっている日本の高等裁判所兼地方裁判所であった「旅順関東法院」を紹介するものである。この旅順関東法院は1906年に地方裁判所兼高等裁判所として設立され、後の1923年8月には地方裁判所の機能は大連に移転し、高等裁判所のみ機関となった。



日本旅順関東法院旧跡外観

1-2. 関東州の概況

まずは関東州の概況を見ておく。日清戦争の結果1895年4月17日に締結された日清講和条約(馬関条約、下関条約ともいう。以下「下関条約」で統一する)により(同年5月8日発効)日本は清国から遼東半島および台湾、澎湖諸島などの主権の割譲を受ける(下関条約第2条、第3条)。しかし、下関条約発効前である同年4月23日にフランス共和国、帝政ドイツ、帝政ロシアが日本に遼東半島の返還を求める勅告を出すことになる(三国干渉)。そして、日本は同年5月4日にこの勅告を受け入れ、同年11月8日に清国と奉天半島遼東半島を締結し遼東半島の主権割譲を放棄するが、1898年3月27日に帝政ロシアが清国と「旅大租界条約」を締結し、翌28日より帝政ロシアが遼東半島の一部を清国から租借することになる。このことも原因の一つになり1904年2月8日より日露戦争が勃発する。これにより、日本は大連を軍事占領し、その際に軍政署を設置し、関東州の統治を行った。そして、1905年5月19日には軍政署を

廃止すると共に、関東州民政署を設置し引き続き関東州の統治を行った。そして、1905年9月5日には日露戦争の終結のための日露講和条約(ポーツマス条約)が締結され(同年11月25日発効)、その第5条により清国の承認を得て帝政ロシアが清国から租借していた遼東半島の一部の権利を日本が引き継ぐことになった。そして、同年9月26日に「関東総督府勤務令」が、10月には「関東総督府官制」が公布され関東総督府が設置され、陸軍大将である大島義昌が初代関東総督に就任し、これに遅れて12月22日に日本は清国とポーツマス条約に基づき「満洲ニ關スル条約(満洲善後条約)[中日會議東三省事宜条約]」を締結し、日本は清国との関係でも法律上の関東州の統治権を得ることになった。

後の1906年7月31日に勅令第196号「関東都督府官制」が公布されて9月1日には関東総督府は関東都督府に改編され、さらに1919年4月11日には勅令第94号にて関東都督府は関東庁に改称した。さらに後の1934年12月26日勅令第348号「関東局官制」により、関東庁は廃止され、代わりに新京(満洲国の首都。現在の長春)の満洲国大使館内に内閣総理大臣の監督に属する関東局が設置された。さらに別途、旅順(後に大連)には関東州庁が新設され、関東局は、関東州庁の監督などを行った。

そして、1945年8月15日に日本が無条件降伏をし、同月22日に中華民国国民政府とソビエト連邦政府は「中ソ友好同盟条約」を締結し、この中で旅順口は中華民国国民政府とソビエト連邦政府双方の海軍が軍港として共同利用することとし、その他の関東州はソビエト連邦軍が統治することに合意し、日本の植民地としての関東州は消滅した。

1_表1/関東州司法の時期的区分

時期	区分名	特徴
1905年1月～1905年8月	軍政時期	遼東守備軍司令部が管轄する連軍政署軍政委員、金州軍政署軍政委員、旅順軍政署軍政委員の3か所が司法業務を行っていた時期
1905年8月～1906年7月	司法委員時期	関東州民政署司法委員が管轄する大連民政支署司法委員、旅順民政支署司法委員、金州民政支署司法委員の3か所が司法業務を行っていた時期
1906年7月～1906年8月	審理所時期	関東総督府関東州審理所が管轄する初審部および復審部が司法業務を行っていた時期
1906年9月～1908年9月	法院時期	関東都督府が管轄する地方法院および高等法院が司法業務を行っていた時期
1908年10月～1924年12月	二審制法院時期	関東都督府もしくは関東庁が管轄する地方法院大連支庁、地方検察局、地方法院、高等法院、高等検察局が司法業務を行っていた時期
1924年12月～1945年8月	三審制法院時期	関東庁が管轄する地方法院、地方検察局、高等法院復審部、高等法院上告部、高等検察局が司法業務を行っていた時期

2. 日本旅順関東法院旧跡展示内容

ここでは、日本旅順関東法院旧跡の展示内容から関東州の司法状況について見ていく。

2-1. 関東州司法の時期的区分

日本による関東州統治は、1905年から1945年まで続いたが、司法制度に関しては、この40年間は6つの時代に区分できる。これらは(1_表1)のようにまとめることができる(なお、大連市中級人民法院課題組(2017:p.87)も同様の6区分を行っている)。

また、1908年10月³⁾に関東州裁判令(勅令第212号)が公布され、これにより法律上中国人は差別の対象になり、過酷な状況に追い込まれたという⁴⁾。

2-2. 関東州の司法統計

日本旅順関東法院旧跡には関東州の司法統計なども展示されている。これらの統計に関しては以下の通りである。(2_表1)は、高等法院および地方法院で行われた民事裁判の結果に関する統計、(2_表2)は刑事裁判の結果に関する統計である。

また、展示されている法院長についての資料は、(2_表3)、(2_表4)の通りである。

2-3. 安重根裁判の法廷

1909年10月26日にハルビン駅で、朝鮮人である安重根は日本の初代総理大臣であり、初代韓国統監でもあった伊藤博文を暗殺した。このとき安重根は在ハ

2_表3/高等法院院長

在職時期	氏名
1907年～1924年	平石 氏人
1925年～1932年	土屋 信民
1933年～1934年	杉浦 忠雄
1935年～1938年	鹿島鶴之助
1939年～1943年	堀部 市郎

1944年以降空位

2_表4/地方法院院長

在職時期	氏名
1907年～1908年	西 平
1909年～1911年	真鍋 十蔵
1912年～1913年	藤田 菊江
1914年～1915年	多羅尾 篤吉
1916年～1926年	土屋 信民
1927年～1929年	安住 時太郎
1930年～1934年	森本 豊太郎
1935年～1942年	中里 龍

1943年以降空位

2_表1/関東州で行われた民事裁判結果の統計 ※1918年は資料欠番

年	総数		原告勝訴 ⁵⁾		原告敗訴 ⁶⁾		取り下げ		その他	
	高等	地方	高等	地方	高等	地方	高等	地方	高等	地方
1906		158		133						
1907	86	527	70	434			10	43	6	50
1908	54	278	48	237			6	36		5
1909	70	106	54	36		39	11	27	5	4
1910	49	62	29	26	14	22	6	14		
1911	60	81	33	22	15	40	11	18	1	1
1912	76	85	39	16	22	40	14	27	1	2
1913	64	69	25	8	11	41	25	20	3	
1914	82	52	34	15	25	23	18	13	5	1
1915	46	58	13	19	17	18	13	20	3	1
1916	49	51	19	14	8	17	10	15	12	5
1917	33	66	11	6	11	38	6	15	12	5
1919	34	184	16	27	10	43	7	47	1	67
1920	34	292	11	32	8	112	7	111	8	36
1921	31	527	14	84	7	180	7	183	3	80
1922	36	605	7	97	8	194	18	214	3	100
1923	52	856	14	152	15	367	17	244	6	93
1924	68	962	25	379	19	205	22	248	2	130
1925	80	1302	32	404	19	275	22	399	7	224
1926	88	888	23	217	18	265	36	74	12	132
1927	93	1165	25	328	19	296	34	291	15	250
1928	112	986	47	263	16	287	43	253	6	183
1929	107	863	47	262	19	182	26	239	15	180
1930	125	1011	33	523	32		45	267	15	221
1931	122	1088	29	589	18		48	228	27	271
1932	136	1216	43	632	18		60	264	15	320
1933	160	1330	48	667	23		64	328	25	335
1934	234	1200	88	608	57		66	301	23	291
1935	161	1061	58	560	16		52	221	35	280

2_表2/関東州で行われた刑事裁判結果の統計

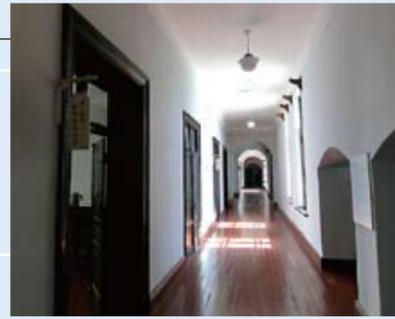
年	総数		有罪		無罪		棄訴		免訴		取り下げ		その他	
	高等	地方	高等	地方	高等	地方	高等	地方	高等	地方	高等	地方	高等	地方
1906	8	326		289		7	8	30						
1907	41	717		660		19	40	38						1
1908	48	675		655		20	45							3
1909	40	238		229		9	34				6			
1910	43	191	20	188	12	2		1						
1911	49	212	21	212	17						11			
1912	37	176	17	174	10	2					10			
1913	49	130	21	130	16						12			
1914	32	136	8	135	15	1					9			
1915	29	140	6	138	17	2					6			
1916	23	128	9	125	7	1					7			
1917	42	144	8	144	24						10			
1918	69	179	17	177	30	1					22			
1919	60	429	22	425	26	1					12			
1920	76	556	22	544	37	6					17			
1921	62	634	18	623	23	10					21			
1922	114	609	28	586	58	15					28			
1923	78	713	20	700	37	11					21			
1924	99	739	33	716	40	12		11			26			
1925	119	807	49	773	31	27		7			39			
1926	135	894	85	862	10	20	1	12			39			
1927	142	1541	92	1524	13	14	3	3	1		33			
1928	189	1760	104	1489	11	20		251			74			
1929	174	1366	107	1348	14	13		5			53			
1930	139	1437	91	1411	14	16	10				34			
1931	123	1317	74	1290	8	19		8			41			
1932	122	1613	57	1538	19	43		32			46			
1933	134	1485	76	1449	18	9	7	27	1		32			
1934	110	1561	92	1533	17	6		22			11			
1935	85	1865	51	1812	1	3		50			33			

Do you hear the people sing? デモの街・香港の声を聞く

文・写真／倉田 徹

くらた・とおる／立教大学法学部政治学科教授・アジア地域研究科長

2008年東京大学大学院総合文化研究科博士課程修了、博士(学術)。在香港日本国総領事館専門調査員、金沢大学国際学類准教授などを経て2017年より現職。専門は香港政治。著書『中国返還後の香港—「小さな冷戦」と一国二制度の展開』(名古屋大学出版会)、『香港：中国と向き合う自由都市』(共著、岩波新書)など。



写真下／資料館入口
中上／内部(法院廊下)
中下／内部(高等法院法廷入口)
右上／安重根に死刑判決を出した法廷
右下／高等法院院長室

3. おわりに

ここまで、日本旅順関東法院旧跡の展示などから関東州の司法状況について紹介してきた。結論から言うと、日本旅順関東法院旧跡は非常に残念な施設と言える。本稿の註3や註4でも述べたように、展示内容に若干誤りがあったり、中国人が差別されていたとは言い難い条文であるにも関わらず、中国人は過酷な状況を強いられたと展示したりしている。これらの点から、日本旅順関東法院旧跡は日本の植民地統治は劣悪であったことを宣伝するプロパガンダ施設としての側面が大きいように思える。

本稿で見てきた点以外にも、日本旅順関東法院旧跡には「刑具」などの展示もある。しかし、これらの「刑具」は人の死体そのものを消滅させるための白など、人の死体を完全に消滅させることができるというその解説に疑問符がつくような展示がされている。このように展示内容に疑義があるため、これら「刑具」は本稿では紹介しない。そして、やはり日本旅順関東法院旧跡は、プロパガンダ施設であるという側面はあるであろう。

しかし、プロパガンダ施設の側面があったとしても、関東州の司法状況について詳細に展示している施設は管見の限り他にはないし、安重根に死刑判決を出した法廷が現存している点などその歴史的価値が大きく失われることにはならないであろう。興味を持った方や植民地法制、日中

関係史などを専門にしている方には一見の価値ありの施設として一度は訪れてほしい場所である。

<日本旅順関東法院旧跡基本情報>

住所／大連市旅順口区黄河路北一巷33号
開館時間／8:30～16:30

- 1) この場合の植民地とは、国際法上の植民地を意味する。すなわち、宗主国に隷属するもの、宗主国とは異なる法が適用される空間をいう(法律用語研究会 2006: p.751の「植民地」の項目)。
- 2) 誤解されることが多いので、あえて記すが、現在の中国の黒竜江省、吉林省、遼寧省(大連市の一部を除く)、内モンゴル自治区の一部(フロンボイル市、ヒンガン盟、通遼市、赤峰市)に1932年3月1日から1945年8月18日まで存在していた満洲国は、形式的には独立国家であるものの日本が国家運営に強く関与しており、「傀儡国家」と呼ぶべきである。これに対し、関東州は明確に日本の「植民地」であり満洲国とは位置づけが異なる。
- 3) 日本旅順関東法院旧跡の展示では、関東州裁判令の公布は1908年10月とのことである。しかし、実際には関東州裁判令の公布は1908年9月22日であった(24日との記述もある)。「関東州裁判令○関東州裁判事務取扱令○関東州弁護士令○関東州罰金及管刑処分令ヲ定ム」1908: 2枚目; 外務省条約局法規課 1966 p.210)。
- 4) 本文の表現は日本旅順関東法院旧跡の展示の通りであるが、関東州裁判令や同時に公布された関東州裁判事務処理令(勅令第214号)などにより、手

続法に関しても大きな進歩がなされたとの評価もある(大連市中級人民法院課題組 2017: p.177)。そして、関東州裁判令には日本人と中国人と差別的に取り扱う条文は見受けられない。中国人が差別の対象となった根拠は、関東州裁判令ではなく、「関東州罰金及管刑処分令」(1909年9月26日公布、同年10月1日施行。勅令第236号)ではないのだろうか。しかし、この関東州罰金及管刑処分令第1条は「三月以下ノ懲役ノ刑ニ處スヘキ支那人ノ犯罪ニ付テハ其ノ情状ニ依リ罰金又ハ管刑ニ處スルコトヲ得」と規定し、むしろ中国人というだけで減刑することにしており、「中国人に対する差別があり、過酷な状況に追い込まれた」とは言えないと指摘しうる。「関東州裁判令○関東州裁判事務取扱令○関東州弁護士令○関東州罰金及管刑処分令ヲ定ム」1908: 134枚目)。

<参考文献>

- 外務省条約局法規課(編)(1966)『関東州租借地乙南滿州鉄道付屬地(前編)』(『外地法制誌』第六部)外務省条約局法規課、法令用語研究会(編集執筆)(2006)『有斐閣 法律用語辞典』(第3版)有斐閣。
- 大連市中級人民法院課題組(2017)『日殖民時期“関東州”司法裁判研究』中国・法律出版社。
- 「関東州裁判令○関東州裁判事務取扱令○関東州弁護士令○関東州罰金及管刑処分令ヲ定ム」(1908)(国立公文書館アジア歴史資料センター所蔵、レファレンスコード: A01200038400、国立公文書館における請求記号: 類01067100)。

高橋孝治(たかはし こうじ)

一般企業勤務・立教大学アジア地域研究所特任研究員
日本文化大学法学部卒業、法政大学大学院修了(会計修士(専門職・MBA))、都内社労士事務所に勤務の傍ら放送大学大学院修了(修士(学術)研究領域: 中国法)。後に退職・渡中し、2017年中国政法大学刑事司法学院博士課程修了(法学博士)。台湾勤務を経て現職。専門は比較法(中国法・台湾法)、中国社会を素材にした法社会学。行政書士有資格者、特定社労士有資格者、法律諮詢師(中国の国家資格「法律コンサルト」)。著書に『ビジネスマンのための中国労働法』(労働調査会、2015年)、『中国年鑑2019』(共著・(一社)中国研究所(編)、明石書店、2019年)など。

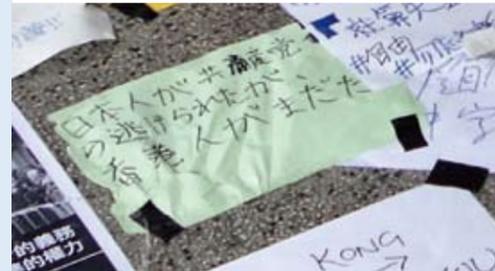


写真1 / 「日本人は共産党から逃げられたが香港はまだ」

2019年の香港の政治的混乱は、年が明けた今も収束する気配がない。この抗議活動はそもそも一体何なのか、把握した説明することは実に難しい。ネットで動員されるデモには特定のリーダーがおらず、参加者は顔と身分を隠している。運動の趣旨は誰も説明してくれないのである。

しかし、デモの主張を知る方法はある。ヒントは文字情報である。いま香港の街を歩き、足許を見れば、デモ参加者の宣伝

ビラが至る所に貼られている。私たちはそこからデモの「声」を聞くことができるのである。写真はどれも筆者が6月以降に香港で撮影したものである。

デモ参加者は様々な感情を表明している。まず、「中国化」への恐れである。写真1は日本語で書かれていた。写真2は、私は今まで通り香港が「上街(デモ)」ができる街であって欲しい、中国式の「上訪(陳情)」をするような場所にしたいとの意味である。自由の喪失への危機感がひしひしと伝わる。デモを警察が暴力で鎮圧したことへの怒りも強い。写真3は、行政長官は若者を殺すな、という、ストレートなメッセージである。しかし、こうした恐怖や怒りだけでなく、写真4にあるように、香港人頑張れ・負けるな・愛してるというような、人々の団結を訴える言葉も多い。

一方、ビラはデモへの動員にも使われて

いる。空港デモ(写真5)や、授業ボイコット(写真6)など、様々な行動の予告と宣伝も、こうした形で街頭に現れる。多数の賛同者が集まれば、自然とこれらの作戦が実行されるのである。

8月になって目立ったのは英語のビラであった(写真7)。デモ参加者は国際社会を味方につけることで、中国の巨大な力に対峙しようとした。現に、デモは米国議会の味方にし、当初は香港に全く興味を示さなかったトランプを動かし、「香港人権・民主主義法」の成立を実現させてしまった。

国際政治の焦点にまで浮上した香港の危機であるが、世界を動かしたのは、A4紙やポストイットに書かれたような、こうした無名の市民による声の積み重ねだったのである。



写真2 / 「我要上街不要上访」



写真3 / 「林鄭月娥若者を殺すな」

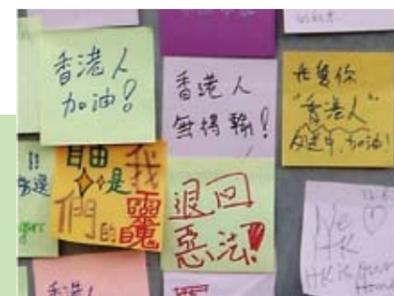


写真4 / 「香港人頑張れ・負けるな・愛してる」



写真5 / 空港デモの呼びかけ



写真6 / ボイコットの呼びかけ



写真7 / 英語で香港人権民主法案を要求

『リユーペ外国図コレクション』 『植民省所蔵図』マイクロ資料について

久礼克季

2017年度に始まった「渡海者のアイデンティティと領域国家：21世紀海域学の史的展開」では、先行プロジェクトの「21世紀海域学の創成—「南洋」から南シナ海・インド洋・太平洋の現代的ビジョンへ—（2012-2015年度）」において入手した、オランダ国立文書館〈Nationaal Archief〉が所蔵する『リユーペ外国図コレクション〈Verzameling Buitenlandse Kaarten Leupe〉』と『植民省所蔵図〈Ministerie van Koloniën - Kaarten en Tekeningen〉』をマイクロ化した資料の分類・整理を行っている。当該のコレクションは、19世紀に当時のオランダ中央文書館〈Algemeen Rijksarchief〉（現・オランダ国立文書館）にて編纂されたもので、前者は1583～1814年、また後者は1814～1963年の各図を収録する。

本体と補遺で構成される前者は、本体がリユーペ〈P. A. Leupe〉によって編纂されたことから、本体に『4. VEL』および『リユーペ外国図コレクション』、補遺には『4. VELH』と『リユーペ外国図コレクション—補遺 1〈Verzameling Buitenlandse Kaarten Leupe: Eerste Supplement〉』との分類番号〔記号〕と分類名がそれぞれつけられている。また、後者は本体に『4. MIKO』および『植民省所蔵図』の分類番号〔記号〕と分類名が付与される。各コレクションの分量は、文書番号が付与されたものでVELが3114点、VELHが954点、MIKOは6280点である。使用言語は前者がオランダ語、フランス語、英語、ラテン語、デンマーク語、スペイン語、イタリア語、ジャワ語、後者はオランダ語、フランス語、英語、ドイツ語である。

構成についてみると、『リユーペ外国図コレクション』は、本体・補遺ともに「海図集・世界地図集〈Zee-Atlassen, Wereldkaarten〉」、「海図・沿岸図・河川図〈Zee-, kust en rivierkaarten〉」、「地図・設計図〈Landkaarten, Plans〉」から成る。また『植民省所蔵図』は、「オランダ・海外領土・貿易拠点関係〈Nederland, overzeese gebiedsdelen en handelsposten, inclusief verbindingen hiermee〉」、「非地誌関連スケッチ・写真〈Tekeningen en foto's betreffende niet-topografische onderwerpen〉」、「個人コレクション〈Gedeponeerde collecties en archieven〉」、「地図コレクション〈Verzamelde kaarten〉」、「現存・廃止諸施設所蔵図目録〈Eigentijdse en vervallen toegangen〉」から構成される。上記からわかるように、両コレクションでは地図や海図だけでなく、都市や城塞、要塞などの設計図やスケッチ・写真も数多く収録されており、非常に興味深い。ここでは、現在整理・分類を行っている『リユーペ外国図コレクション』から6点の図を挙げて紹介していく。

図1は、VELbisとして収録されるアーノルド・コロム〈Arnold Colom〉によって1658年にアムステルダムで刊行された地図集に掲載される世界地図である。17世紀中葉に制作された同図は、オーストラリア大陸の描写が南西部の一部にとどまり日本についても本州が関東地方までの太平洋沿岸しか描かれていないことなど、当時のオランダ人における世界認識の一面が示されている。

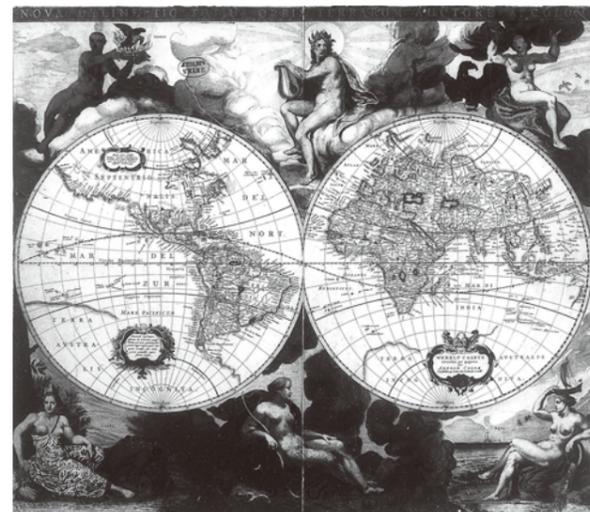


図1 / 1658年にアムステルダムで刊行された地図集に掲載される世界地図

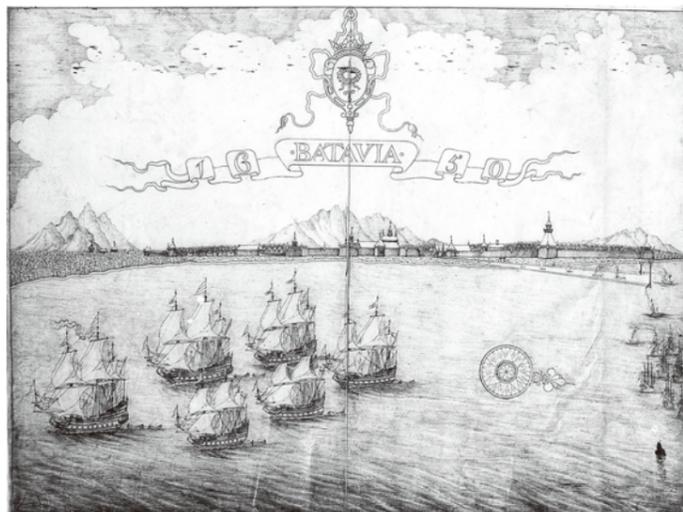
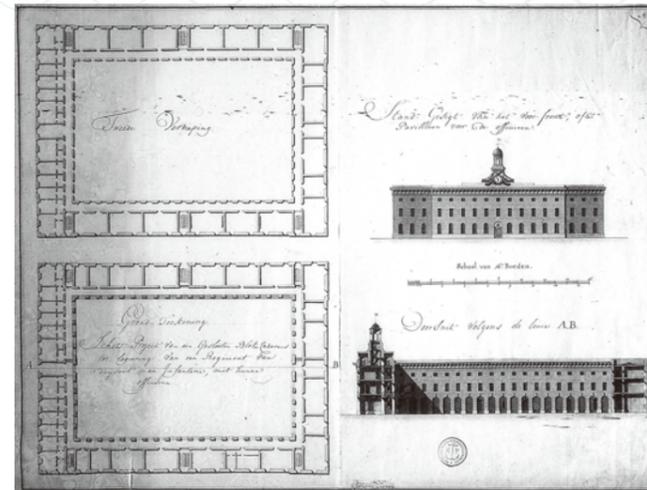


図2 / バタヴィアの停泊地から見たバタヴィアの都市を描いたスケッチ



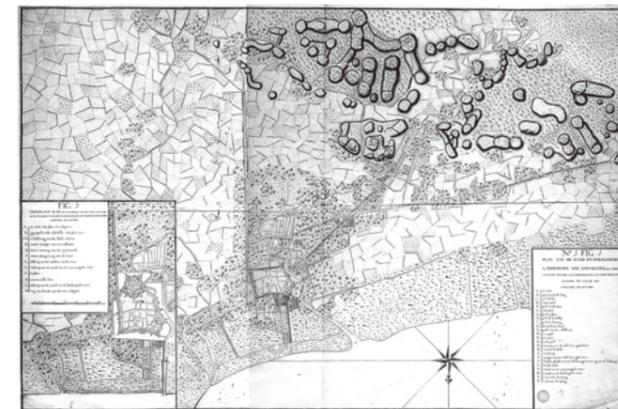
(左) 図3 / 18世紀バタヴィア近郊の兵舎設計画図
(右) 図4 / 1783年に描かれた当時のオランダ東インド軍制服のスケッチ

図2のVEL1180は、1650年のネッセル〈J. Nessel〉による図の1つで、バタヴィアの停泊地から見たバタヴィアの都市を描いたスケッチである。同市が17世紀中葉において既に場内外ともに賑わっていたことをうかがわせる。

図3で示したVEL1228は、18世紀バタヴィア近郊の兵舎建設設計画図である。左図の1階および2階の構造から当該の建物が回廊式であること、また右図にある外観からはこの建築物が煉瓦造りで塔と外付け階段を備えていることがわかる。オランダはこの当時から詳細な設計図を多数残しているが、これはその1つである。

図4のVEL1226は、1783年にローランド〈H. Rolland〉により描かれた当時のオランダ東インド軍制服のスケッチである。制服を着て描かれている人物は3人だけであるが、当時における軍の制服を描いたものは数少なく、非常に貴重な資料といえる。

図5は、1788年に制作された中部ジャワのスマラン市とその周辺地域を描いた地図のVEL1268である。当該の地図は丘陵部や各地の植生も細かく描写しており、オランダが当時の地図製作においても詳細な描写を行っていたことをうかがわせるものである。



(左) 図5 / 中部ジャワのスマラン市とその周辺地域を描いた地図
(右) 図6 / 1825年にジャワ人によって描かれたスマラン周辺地図

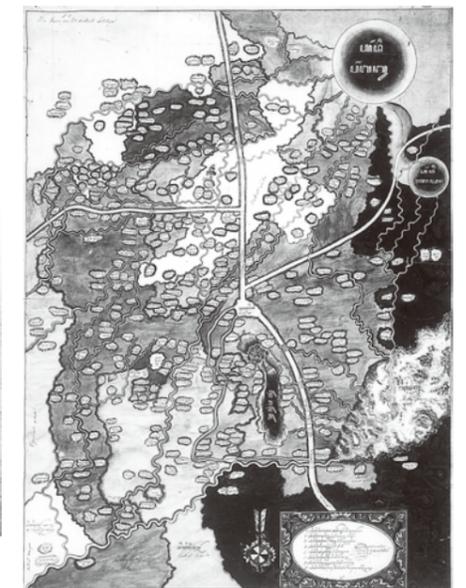


図6のVELH501は、1825年にジャワ人によって11点描かれたスマラン周辺地図の1つで、これはスロティガ〈Selotiga〉地域を描いたものである。1世紀前に近接する地域を描いた図5と比較すると、オランダ人とジャワ人の地図製作手法の違いがわかる、非常に興味深く貴重な地図といえる。

今回紹介したコレクションは、立教大学では『リユーペ外国関係図コレクション』が『The Early Period, 1583-1814 (1840)』、また『植民省所蔵図』が『Collection of Ministry of the Colonies, (1702) 1814-1963』として立教大学図書館に所蔵されるマイクロフィッシュである。ともに興味深い図を数多く収録しており、特に『植民省所蔵図』は原蔵者であるオランダ国立文書館でもまだデジタル化がほとんどなされていないため、極めて貴重な資料といえよう。これらが今後多くの調査・研究において積極的に利用されることを期待したい。

Profile

久礼克季 (くれ・かつとし) /

立教大学大学院文学研究科〔史学専攻〕において博士号〔文学〕取得。現在は、アジア地域研究所特任研究員、川村学園女子大学非常勤講師、東京大学史料編纂所特任共同研究員。専門は東南アジア史で、近世期ジャワ島における華人の活動について研究を行う。

「開発と文化」 日常の視点から開発を考える

豊田 由貴夫
立教大学観光学部教授

久しぶりの講義

昨年度、観光学部の専門科目「開発と文化」、「観光人類学」の二つの講義を行った。これ以外はゼミと大学院の授業であったが、実は講義をするのは久しぶりで、なんと10年ぶりであった。これまで大学の役割をやり続けていて、いくつかの授業は免除してもらい、それに講義科目をあていたので、こうなった次第である。代わりの方にずっと担当していただいて、「自分の」科目であることを忘れるぐらいであった。

講義をやるに当たっては、10年前の講義ノート、パワーポイントのデータもあるのだが、久しぶりに見返してみると古くなっている内容があり、今となってはそのままでは納得して授業をやる気にもなれないので、全面的に内容を考え直すことにした。

教えられる側の視点

いくつか授業で心がけたことがあった。一つは、「教える側」の視点より「教えられる側」の視点を重要視しようとしたことだ。教師はとすれば、これまで学界で議論されてきた学界内の主要な理論を教えたがる。そしてそれが教えられる側、学生にも有益なのだと思える。しかし教えられる側から見れば、学界内の理論は学生にとっては「遠い」ものと感じてしまうのではないかと、ずっと感じてきた。学生がみな研究者になるのならいいのだが、大

部分の学生にとってそれが「遠い」内容であるならば、試験が終わった段階で内容を忘れてしまい、その後は何も残らないものになってしまう。そのような内容にはしたくないとずっと思い続けてきた。

そんなことを考えるのは、十数年前に見た光景が印象に残っているからである。他の教員の授業の試験監督補助をした際、他の人より早めに試験を終えた一人の学生が教室を去る際に、授業関係の資料らしきものを、教室の隅にあるゴミ箱にドサッと捨てたのを目にした。あたかも、この授業の内容はこれで終わり、もう忘れたい、そう言っているかのように、かなりの量の資料を、勢いよく捨てたのである。

日常生活に「近い」内容

それ以来、授業をやる際には、学生に何らかの形で残るような授業であるようにと意識してきた。理論や専門用語を教える際には、それが学生にとってどのような意味があるのか、社会を見る際にどのように影響を与えるのか、われわれの生活とどう関わるのかを意識してもらうように教えることに努めてきた。

「開発と文化」、「観光人類学」はともにスタンダードな授業内容が決まっているわけではなく、扱う内容は担当教員の裁量に委ねられている。そのため、これまで教え

る意味があるのか、あえて特殊な専門用語を教える必要があるのかなど、再考したのであった。

授業の実践

「開発と文化」の授業では、とすれば「開発」とは学生にとって日常生活とはかけ離れた世界のこととされてしまう。しかし授業では、それがわれわれの日常と深く関わりがあることを示し、世界を見る目を養えるように意識し、併せて関連する社会的常識も身につけてもらうことを目標とした。毎回の授業の始めには問題提起を行い、その回に考えてもらうことを明確にした。そして教室を動き回って学生の意見を聞くことも意識した。また、具体的事例を考えてもらうために、JICA 関連の業務をしていたゲストスピーカーを2名お招きして、マンマーの事例、ラテンアメリカの事例を紹介してもらった。

そして学生からの評価はどうだったのだろう。久しぶりに学生評価アンケートも受けることとなったが、総合的な評価は確か4.3で、これが高いのか低いのか、他の授業と比較できないので何とも言えない。しかし、最後の授業が終わった際に、一人の学生が教壇に駆け寄ってきて、「先生、授業、面白かったです」と言ってくれたので、とりあえずは満足している。



写真1 開発の調査の現場：サゴヤシの収量を計る（バブアニューギニア、ブーゲンビル島）



写真2 開発の調査の現場：ソロモン諸島、ホニアラの市場

「大衆演劇の世界」「演芸の世界」 (全学共通科目)

細井 尚子
立教大学
異文化コミュニケーション学部教授

コラボ科目だからできること

アジア地域研究所から、全学共通科目と総合科目のコラボ科目として、2つの科目を提案、開講しています。2つともサブ・タイトルは「ポスト・グローバル時代の大衆文化」、いずれも近年、「東アジア」「近代」「大衆」などをキーワードに、科研や立教SFR 共同研究の研究助成を得て継続している研究プロジェクトの研究成果に基づいています。

このコラボ科目という枠は3人の講師と一緒に授業をするもので、ほぼ毎月1回土曜日に3-5限の3コマ集中を4回、3-4限を1回という変形の集中開講で実施しています。毎回取り上げるものを1つに絞り、その研究者+実演者、制作者など実践関係者、それに私の3人で担当します。集中開講ですと、その芸態を知らない、初めて接する学生にとっても、講義による知識に加え、映像を見たり、実際にその芸態を実演して頂いたり、ワークショップで経験してみたりする時間を確保できるので、この科目にとっては理想的な形態です。19年度から1コマ100分になりましたので、3コマは300分、月1回とはいえ、週末土曜日の午後5時間も授業を受けようという学生の意欲を無駄にしないよう、少しでも内容が充実したものになるよう努めています。今年度は春学期に「大衆演劇の世界」を池袋で、秋学期に「演芸の世界」を新座

で開講しました。どちらも学生は「観客」の立場から取り上げる芸態に向き合うとともに、実践関係者の時間には制作側に立ったアプローチも経験します。

授業の内容と構成

「大衆演劇の世界」の授業目的は「東アジアの大衆的な芸態（演劇・演芸・ショー・芸能など）を取り上げ、娯楽市場をサンプルに、『近代化』と『グローバル化』の相違について考え、理解する」とし、「軽演劇・喜劇」「中国のアイドル」「座長芝居」「講談」「石見神楽」を取り上げました。不思議なラインアップに感じられるかもしれませんが、お勉強ではなく娯楽として楽しむ・楽しんできた芸態を、通常観念によるジャンル分けを超えて選択した結果、近代化以降生まれたもの、近世から続くもの、近代化により忘れられ、蘇ったもの、宗教・民俗的文脈と娯楽の交点にあるものという構成になりました。それぞれの芸態を通じて、大衆的な娯楽とはどのようなものか、娯楽市場における近代化とグローバル化の影響がどのようなものか、両者の相違はどこにあり、その相違は何に起因するのかといった問題を、学生が考える上で参考となるよう、各々に対する研究成果も紹介しています。今年度は「軽演劇・喜劇を読み解く」で講師としてお招きしたテレビ番組のディレクター牛島真一さんが、後日、学生に「欽ちゃん

のアドリブで笑（ショー）」の収録に参加できる機会もご提供いただきました。始めてテレビ局のスタジオに入り、番組が作られる過程を経験できた学生にとって、素晴らしい機会になりました。

秋学期の「演芸の世界」は、「近代化からグローバル化に移行する影響を受け、娯楽市場において『演芸』の属性が新たな文脈で置換され、娯楽ソフトとして機能しています。『演芸』の代表的空間である寄席とそこで演じられる寄席芸を通じて、ポスト・グローバル時代の娯楽文化の特性を理解する。」を授業目標とし、「落語」「浪曲」「女流義太夫」「物真似」を取り上げています。落語ブームとはいえ、実際に寄席に行った経験のある学生は少なく、毎回実演者を講師としてお招きし、実演とワークショップをより充実させています。

近代化によって影を薄くした近世以来の芸態が、グローバル化の影響で復活する背景には、90年代以降顕著になる娯楽市場とそのソフトに生じた大きな変化があります。実は東アジアの娯楽市場では、ほぼ同時期に大きな変化が生じており、授業の最終回では東アジアに視界を拡げて捉えなおす工夫もしています。楽しみながら、その奥にある問題について認識し理解し、考える、そんな授業を目指しています。



写真（左から）女流義太夫、落語、石見神楽



19

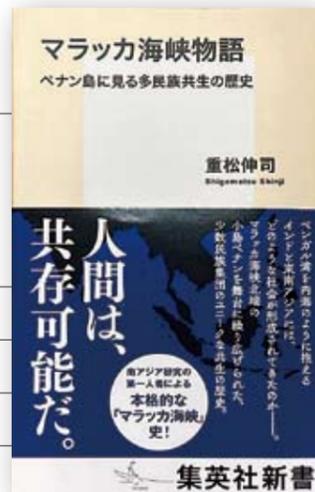
マラッカ海峡物語 ペナン島に見る民族共生の歴史

著者／重松伸司

発行／集英社 (2019)

価格／920円(税別)

評／弘末雅士 (立教大学名誉教授)



本書は、1786年にイギリス人フランス・ライトによって開港された、マラッカ海峡北端のペナンの多様な集団の共生の歴史に着目する。ペナンをとらえて、18～20世紀のベンガル湾海域における人々の交流や交易に光を当てる。対立や抗争を繰り返しながらも、融合的な生活様式を生み出した異文化集団間の知恵を描こうとする。

ライトが開港する以前から様々な海民が、ペナンを訪れ活動していた。ライトはこの島をクダールのスルタンより割譲し、関税や寄港税のかからない自由港とした。イギリスがこの島にジョージタウンを建設すると、マレー人をはじめヨーロッパ人、華人、インド人、アルメニア人、ポルトガル系ユーラシア人などが居住し始める。19世紀終わりから日本人も参入する。イギリスのアジアにおける海洋帝国の拠点として、ペナン・マラッカ・シンガポールの海峡植民地は、重要な役割を担う。18世紀末には1000人足らずであったペナンの人口は、1810年に1万3885人、1858年には約6万人(マレー系2万人、インド系1万2千人、華人2万8千人)、1931年に14万9408人に増加した。

筆者は、ペナンで諸民族が緩やかな棲み分けをしていたことを明らかにする。イギリスは、諸民族集団の頭目をカピタンに任命し、当該集団の管轄を委ね、19世紀の終わりまで管轄下の人々に直接干渉しなかった。ペナンの総人口に占めるヨーロッパ人の数は、1835年に790人、1931年に1174人で、全体の1パーセントにも満たなかった。19世紀中葉に人口の半数近くを占めたのは、華人である。彼らは、有力

商人が東南アジアと中国間の交易を担い、その他の多くが家屋の建設、荷駄引き、農園労働、小商い、雑役などに従事した。開港当時のペナンでは、マラッカ海峡域で活動していた「福建五大姓」と呼ばれた有力華人が強い影響力を行使したが、19世紀中葉より客家や広東出身者も含めた新客が多数到来した。彼らの多くは、地縁や宗縁にもとづく相互扶助を謳う秘密結社の会党に属した。会党のリーダーは、カピタンとも重なる有力企業家達であった。

またインド系住民は、港やジョージタウンのインフラ建設、治安維持にあたり、有力商人は、東南アジア系の商人とともに東南アジア～インド間の交易を担った。南インド出身者が多く、有力商人チェッティが支えるサンガムと呼ばれる宗教的、相互扶助的組織が彼らの結束を強めた。またチュリアと呼ばれた南インド出身のムスリムは、マレー人と交流の歴史を有し、ペナンのインド系住民とマレー人の社会統合をはかる上で、重要な役割を担った。初代のインド系住民のカピタンとなったのは、チュリアの有力者であった。

筆者が諸集団のなかで注目するのが、アルメニア人である。アルメニア人は、すでにインドにおいてイギリス東インド会社と相互依存関係を形成していた。彼らは少数数の家族で活動し、東アジア～インド～西アジア間でさや取り貿易を行った。中国にアヘン、綿布、錫、胡椒を輸出し、中国から茶、タバコ、肉桂、東南アジアから蘇木を輸入した。こうして形成されたネットワークを活用し、アルメニア人はさらに国際海運業や保険業、海底通信ケーブルの敷設や

ホテル業に乗り出していく。

一方、ペナンでは1867年の会党間の対立が、他の民族集団も巻き込んだ。福建出身者によって結成された建徳会は、華人だけでなく、アチェ・ムスリムの秘密結社紅旗会とも手を結び、勢力を拡大した。同時期対抗勢力として、広東・福建出身者を主体とする義興会が台頭した。義興会は、客家の海山会、さらにはインド系ヒンドゥー・ムスリムとマレー系住民を主体とする白旗会と結びついた。華人とインド系やマレー系住民が、それぞれの派に別れて抗争した。抗争を鎮圧したイギリスは、以降諸集団への直接的介入を強め、1890年に結社禁止条例を公布する。

1867年の抗争に華人だけでなく他の民族集団も関係したことは、興味深い。ペナンで多様な集団が共存できたのは、イギリスの政策によるだけではない。本書は、アルメニア人をはじめチュリア、インド系住民だけでなく華人やマレー人にも融資したチェッティ、廃娼令が出るまで娼館を経営した日本人などの活動に言及し、彼らが諸集団のつなぎ役を担った実態を提示する。また直接触れられていないが、やってきたヨーロッパ人、華人、インド系住民は、ほとんどが単身赴任者で、多くが現地人妻妾を有した。彼女らは、地元で商業活動を担い、諸集団の祭事にも顔を出した。こうした異文化集団間のつなぎ役や仲介役に注目するとき、諸集団の交流の仕方が明らかになり、人々の共存と棲み分けの動態が浮かび上がる。本書が描こうとする当時のアジアと西欧の縮図が、人々の生活の場から見えてくるのである。

評／VAN ITTERBEECK Joost (アジア地域研究所特任研究員)

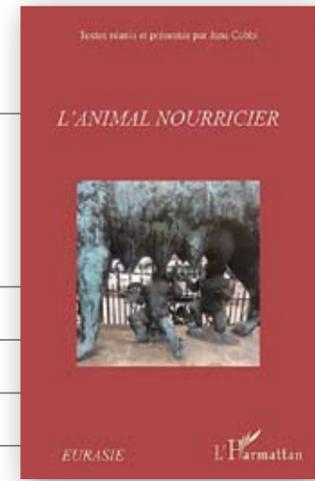
20

L' Animal Nourricier [Animals Nurturing Humans]

編著者／Jane Cobbi

発行／Editions L'Harmattan (2018)

価格／20€



The central aspect of the book is the diversity and complexity of human-animal relations. Humans are predators of animals, rivals of animals, and protectors of animals. This complex relation involves the distance of humans to animals, both literally and figuratively speaking. At the two extremes, there are wild animal resources and domesticated ones. How does this distance of humans to animals affect the human-animal relation? The book's title reflects this concept: the animal resources nurture the human body as well as the human soul.

The book addresses this concept, the influence of distance between humans and animals on the human-animal relation, in seven papers. Unfortunately, only two papers are in English. The other papers are in French but provide an English abstract.

Two papers that deal with an Asian context are written by Japanese researchers who are associated with Najima. Dr. Akimichi discusses gastronomy and animal sacrifice and Prof. Nonaka discusses insects as human food.

The paper "Bons à penser : Les produits laitiers en Mongolie" focuses on milk in Mongolian culture. The human use of milk as a food source is ancient, and it is postulated that milk has been an important driver of animal domestication. Given the importance of milk to human history, it should come to no surprise that milk is still the subject of various symbolic practices and representations. The paper investigates the cultural categories related to dairy products among the rural and nomadic herders inhabiting the Mongolian steppe. The cattle herds are indispensable to the herders' ways of life and prosperity. Following the importance of milk in nutrition, the white color of milk has risen to the top of the hierarchy of symbols among Mongolian herding cultures.

The paper "Interdépendance et consommation de viande chez les Nenets de Sibérie" focuses on the situation where meat is the only food resource. This is the case for the Nenets of north Siberia, who inhabit one of the harshest landscapes in the world. The Nenets have a very diverse and complex relation with animals since humans need to both protect and kill animals. The Nenets have developed a range of rituals to

guide them in this complex relation with animals. The spirituality of both humans and animals is central in the Nenets' human-animal relations.

The paper "Le cochon chez les Slaves de l' Est: Animal prescript ou interdit" focuses on the consumption of pork and the influence of the Christian bible on pork consumption among the eastern Slavs. Pork consumption is well-known to be met with prohibition and with prescription. Among the Slavs, there are considerable differences in attitude toward pork consumption between regions and across time. Justifications for the consumption of pork are mainly found in religious texts and notably the Christian bible. Whether one eats or does not eat pork has developed into a means of self-identification and group identification.

The paper "Le destin gastronomique du taureau de corrida" focuses on bull fights in Spain. The paper explores the ambiguity that surrounds the meat provided by the bull that has been killed in a fight. For some people, bull meat is the idealized product of a highly protected ecosystem in which the bull and its killer are the central elements. The confrontational nature of the killers, called matadors, who look the bulls in the eye, is an important element to the sacrificial nature of bull fights. Bull fights give the killing of an animal a profound social element. It puts a spotlight on the killing itself and the effort man does to face the danger of getting killed himself. Although surrounded by a lot of controversy, bull fights, and the eating of the bull meat that results from the fight, have a significant influence on the distance between man and his meat in Spain. Facing the bulls and the danger they can impose puts traditional Spaniards perhaps closer to nature than those people who wish for the complete abolishment of bull fights.

Dr. Akimichi wrote the paper "Gastronomy and animal sacrifice: Whale and dog meat consumption." and focuses on cases of whale and dog meat consumption. In particular, the social contrasts and varying points of view on the killing of wild animals and of domestic animals is explored. The paper compares the different attitudes of European cultures and Asian

cultures, and how these different cultures reason about the killing of various types of animals is explored.

The paper "Manger du cheval en France: Une question de distance" focuses on horse meat consumption in France. The paper shows how horse meat consumption gained conformity in the 19th century and how legalization of horse meat consumption was achieved. Today, horse meat consumption is under scrutiny in France and horses are more and more seen as companion animals only. The paper explores how the horse meat industry deals with this shift in attitude of contemporary society toward horse meat.

Lastly, Prof. Nonaka wrote the paper "Delightful insects and their use as food in Asian culture: A merger of human world and the natural environment" and focuses on insects as human food in Asian contexts. The authors outline that insects are an important element of Asian food cultures. The paper exemplifies how some insect species continue to have an important role while the role of other insect species is in decline. While many factors affect the inclusion of insects in the diet, the chapter explains the factor of societal re-negotiation. Cultures explore whether insects will remain a part of their foodways, and in what form. The paper indicates a strong diversity of attitudes, perceptions, and choices in Asian contexts.

The book is an excellent collection of cases around the world in which humans have defined their spiritual and psychological relation with animals that are used to nurture the human body. The cases indicate the diversity and complexity of these relations and is therefore a celebration of cultural diversity. Moreover, these cases of human-animal relations illustrate that traditions are dynamic, not static. With societal changes come negotiations. This includes negotiations of our relations to milk and meat, the killing of animals for their resources as sacrificial or mere materialistic, and the inclusion or exclusion of particular types of animals, such as dog, whale, bull, and insect species in human foodways around the world.

もうひとつの「天文対話」

—モンゴル帝国期ユーラシアにおける2つの天文学の邂逅—

● 諫早庸一

いさはや・よういち

北海道大学スラブ・ユーラシア研究センター助教。東京大学総合文化研究科地域文化研究専攻博士課程単位取得退学。博士學位取得論文『一なる天、異なる宙—モンゴル帝国期ペルシア語中国暦の研究—』(2015年)。論文に、「天文学から見たユーラシアの13世紀～14世紀—文化の軸としてのナスィール・アッディーン・トゥースィー(1201～1274年)—」『史苑』79巻2号(2019年)。2019年4月より立教大学アジア地域研究所特任研究員。



筆者近影(ヘブライ大学図書館にて)

モンゴル帝国期(1206～1368年) ユーラシアにおける天文学交流

草原の英雄テムジンがモンゴル高原を統一した後に、チンギス・ハン(治世1206～27年)として創りあげた部族連合体は、彼とその後継者たちの手で東は朝鮮半島、西はハンガリー平原まで至る史上空前のユーラシア帝国となった。勝利と征服の後には、統治の時代が来る。即時的な収奪から、恒常的な徴税へと再分配のサイクルを換えたモンゴル帝国は、二大財源となった地税と商税との徴収のため、前者については在地の財務官僚に管理を委ね、後者については駅伝制や交易路を整備することによって商業の活性化を図った。この交易網——陸海の「シルクロード」とも表現できるだろう——を伝って、軍隊・使節・宗教人・学者・商人といった人や、武具・聖典・学術書・交易品・貨幣といった物、軍事・政治・宗教・学術・信用のような情報が、ユーラシア東西をこれまでになかった規模で行き交うようになる。モンゴル帝国時代とは大征服の時代であり、また人・物・情報の交流の時代でもあった。

「天/テングリ」を戴くモンゴルは、自らの地上の統治が天命によるものと見做していた。結果、彼らは「天命を識る者たち」である天文学者/占星術師たちに格別の関心を寄せ、彼らと彼らの学術とを厚遇する。こうし

て各地のモンゴル宮廷には、多様な学術的背景を持つ天文学者/占星術師たちが集うこととなった。第4代大ハン・モンケ(治世1251～59年)は帝都カラコルムに天文台建設の構想を抱いていたと、「史上初の世界史」として世に知られるペルシア語史書『集史』は語る。

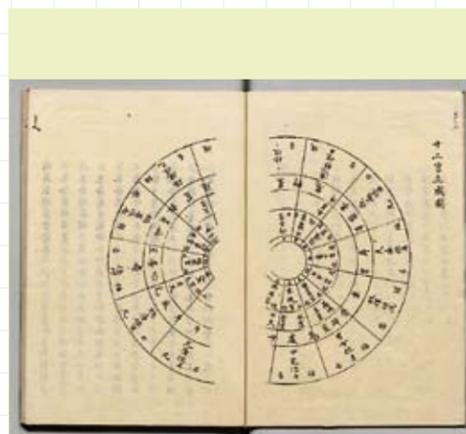
モンケ崩御の後、内戦を経て帝国はチンギスの末子トルイの家系がユーラシア東西で実権を握る情勢となる。西方のイル・ハン朝(1256～1357年)ならびに東方の元朝(1271～1368年)はいずれも天文学に高い関心を持ち続け、13世紀後半には前者はマラーガ(現在イラン北西部)に、後者は大都(現在の北京)に、学術センターとして大規模な天文台を建設する。しかし、この時代においても、円と線とで宇宙を表現する西方ユーラシアの幾何天文学と、数値計算で天体運行を考える東方ユーラシアの計量天文学との間の差異は大きく、ユーラシア東西におけるこれら2つの天文学の相互理解は容易ではなかった。両天文台の交流も現存の史料からはほとんど看取できない。こうした状況の例外が、13世紀イランにおける「天文対話」であった。

13世紀イランにおける「天文対話」

おそらくは1259年頃、イル・ハン朝の創始者フレグ(治世1256～65年)は自らのプレーンであったナスィール・アッディーン・トゥースィー(1201～74年)に、当時宮廷にいた道士・傅孟質から中国の天文学を学び、編纂中の天文書にその内容を書き入れるよう命じた。かくして両者は「天文対話」を行い、トゥースィーが編んだペルシア語天文書『イル・ハン天文便覧』にはアラビア文字圏の天文便覧(zij)としては史上初めて、中国暦が記される。このペルシア語中国暦は、モンゴル帝国期ユーラシアにおける2つの天文学の邂逅の軌跡として、極めて貴重な

史料である。

その内容を分析した結果、このペルシア語中国暦は、既存文献の翻訳ではなくまさに対話の産物であったことが明らかになった。この中国暦のなかには唐代(618～907年)の非公式暦であり、日本にも平安期(794～1185年)に伝来した符天暦の計算法が見える。なぜ8世紀中国の小暦が、13世紀イランの天文書の中に見られるのか。この問いこそが、「天文対話」の実相に迫る鍵となる。符天暦は西域より伝来したホロスコープ占星術のための暦法であった。西アジア発祥であり、その後中国にまで伝わったホロスコープ占星術は、当時のユーラシア東西の学者たちが理解し合える数少ない要素であった。ホロスコープ占星術自体はこのペルシア語中国暦の記述には現れない。しかし、符天暦が対話に用いられたという事実は、この対話がホロスコープ占星術を中心に行われたことを我々に伝えてくれる。実のところ史料に見えない部分にこそ、この「天文対話」の主題はあったのだ。



符天暦を用いた日本のホロスコープ『宿曜運命勸録』続群書類従本(国立公文書館所蔵)

ブルネイ・ダルサラームより

● 大河内博

おおこうち・ひろし

1967年、東京生まれ。日本大学農獣医学部を卒業後、東京農工大学を経て、平成4年、経済産業省(当時、通産省)に入省。米国ヴァンダービルド大学留学。2005年に外務省へ出向、在ブルネイ日本大使館に赴任。2010年に帰国、経済産業省情報通信機器課に勤務。2013年、同省を依願退職し、ブルネイに移住。現在はブルネイ、インドネシアを中心に複数の投資事業を展開する他日系企業のイスラム圏への進出をサポート。東アジア・アセアン経済研究センター(ERIA)総長特別顧問。スマート・シールド・インターナショナル代表取締役。スマート・コーティング・テクノロジーズ代表取締役。



写真1/旧知の仲であるホルキア・ファジラ王女を招き、日本文化展を実施(一番右は観光大臣)

いったいどんな人の到着を待っているのだろうか。

だが、期待を裏切って、その人たちは私の目には、ごく普通のおじさんやおばさんたちのようで、とてもバドミントンの選手には見えなかった。

ただ、その一行の中には黒ずくめの衣装を着た小柄な女性がいて、3、4人のお付きと思える人が周りにいたので、彼女がグループの中でもいちばん偉い人だろうと想像された。実際、その女性から握手を求められると、選手たちは緊張した面持ちで言葉も発さぬまま、前に出てうやうやく手を握って挨拶し、その手を胸に戻しながら下がっていく。

身長150センチぐらいの、小柄でありながら、声量が大きく、威風堂々としたこのオーラを放つ女性。彼女は、一体誰なのだろうか。

お付きに何か言うと、即座に周りの人たちが慌てて対応する。彼女にものを差し出すときにはからならず両手で跪いて献上するようにしているように見える。その雰囲気は普通でなかった。『ブルネイでバドミントンばかりしていたら、なぜか王様と知り合いになった。』(出版:集英社インターナショナル)より一部抜粋～

あれから、10年以上が経った今、私はブルネイで投資会社兼コンサルティング会社を経営している。ここまでは順風満帆な人生を歩いて来たつもりだ。しかし、まだやり足りないことがあったので今はそれにも没頭中である。それは、日本の優れた中小企業のように、技術で勝負できる製造業をブルネイで実現しようというものである。

ブルネイは、東南アジアのボルネオ島北西部に位置する人口約45万人程度の小さな国。シャリーア法導入により厳格なイスラム教国。ブルネイ王室の推定資産はギネスブック上世界一。国民は税金なし、教育費も、医療費もタダ、電気代やガソリン代はめっぽう安

い。優秀な学生の英国留学費も国がほぼ全額負担。おっとりとした国民気質からか、犯罪が少なく、極めて平和かつ静かでリッチな国である。これまでのブルネイにとっては、「新技術開発」、「中小企業育成」、「サービス・製造業」といった経済多様化は、無縁のものであった。しかし、原油価格の下落と共に、ブルネイの石油・ガス資源への一極依存の財政構造は破綻をきたし始め、ここへきて大きな転換を求められている。

海外からの技術移転獲得のため、2014年からブルネイ政府が始めた「ブルネイ技術研究開発支援ファンド」はその表れの一つである。1プロジェクトに最大約5億円を補助するもので、ブルネイに産業を興してほしいという制度である。そこで、日本の光触媒応用技術を導入し、ブルネイ大学内に研究開発施設を立ち上げた。ブルネイの支援により、日本の技術から成る我々の製品は、お陰様で、東京ドーム6個分に等しい敷地内に建てられた豪華で世界中の一級品で彩られたとても美しいブルネイ王宮で大理石壁、屋根につく汚れやカビを防いでおり、今では、屋根全体約3万平方メートルへの表面塗装にまで使われることとなった。タイへも順調に輸出量を伸ばしており、ノーベル賞候補とも言われた日本の光触媒技術が何故まったく国際市場で浸透しなかったかの理由を私は日々肌で感じている。



写真2/日本文化展にて。主賓であるホルキア王女を大臣らと共に招き入れる様子

カンボジアの歴史とキリスト教会を巡る



写真1 / 新しい仏像を拝み眺める女性たち。人びとの願いは内戦終結と安定した日常生活 (1989年)

私は米国留学時代にカンボジア定住難民の人たちと出会ったことがきっかけで、1989年内戦中のカンボジアに入りました。当時はまだ日本との国交がなく、西側の人間の入国は少数の援助関係者だけに許されていました。以来、NGOワーカーとしてカンボジアの地域保健と開発に携わりながら、ほぼ毎年カンボジアを訪問してきました。立教大学に赴任したのをきっかけに、この数年間は、院生や現地の友人と地方の教会や仏教寺院を回り、内戦終了後の社会変化とキリスト教の広がりについて調査しています。

カンボジアのキリスト教

カンボジアにおけるキリスト教の歴史は、16世紀半ばにポルトガルからカトリックのドミニコ会宣教師が到来したことから始まりました。17世紀には、プノンベン郊外の川べりに、日本から来たキリスト教徒の集住地域もあったといわれています。フランス保護領下で主に都市部に住むベトナム系住民の間に広がりましたが、クメール人の信者の数はそれほど増えませんでした。プロテスタントは19世紀末にイギリスから入り、20世紀になってからアメリカの宣教団による布教活動が始まりました。

しかし、1970年代後半のポル・ポト政権(注1※)下で、あらゆる宗教が禁止となり、宗教施設は破壊され指導者は殺害されました。チャムと呼ばれるイスラム教を信仰する人たちの4分の3が犠牲になりましたが、西側・アメリカの手先とみなされたキリスト教徒も虐殺の対象になりました。ポル・ポト政権直前に約1万人いたキリスト教徒のうち、生き延びたのは200人余りであったと推定されています。

ポル・ポト政権からの解放後、各地で盛んに仏教寺院の修築・再建がすすめられました。それは、復興の象徴・村の人たち

の誇りでした。(写真1)(写真2)(写真3) 後にイスラム教のモスクも、アラブ諸国からの支援を受け、徐々に再建されていきました。(写真4)

一方、キリスト教に対しては、政府による厳しい監視が続き、プロテスタント教会は1990年になってから、やっと政府から集会の認可が与えられました。それまで迫害を恐れてキリスト教徒であることを公にする人は、ごく少数でした。ポル・ポト時代を生き延びたクリスチャンの強い意志と、忍耐強い政府への働きかけ、10名のリーダーの連帯によってやっと獲得した信仰の自由でした。(写真5)



(左から) 写真5 / プロテスタント教会の初めての合同洗礼式。メコン川で老若男女約200名が受洗した(1992年)
写真6 / 家の教会のクリスマス礼拝 写真7 / 道ができたところには教会が



(左から)
写真2 / 2015年に完成した仏教寺院。元戦闘地域では、現在も再建が進められている
写真3 / 壁や天井には、仏陀の生涯が鮮やかに描かれ、静寂な内部はどこかカトリックの聖堂に似ている
写真4 / 再建中のモスクで礼拝するチャムの人たち(1990年)



仏教社会に生きる 圧倒的少数者のキリスト教徒

カンボジアでは、大多数が上座部仏教を信仰しています。1993年に制定されたカンボジア王国憲法では、信仰の自由も保障したうえで、仏教を国教として定めています。タイ国境難民キャンプで活動していた欧米の援助団体や宣教団が、難民の帰還と共に一斉にカンボジア国内に入るに伴って、キリスト教も国内各地に広がっていきました。また、キャンプで入信し、故郷に戻って熱心に伝道する帰還難民も少なからずいました。

現在のキリスト教人口は、政府統計では1パーセント未満ですが、様々な推計を参考にすると、概ね3パーセント位(その1割がカトリック)が実質ではないかと思われます。プロテスタント教会は2017年時

点で3200ヶ所を超え、その様相は実に様々です。中には5階建てのビルを持つ巨大な教会もありますが、多くは教会としての建物を持たず、牧師やリーダーの自宅で集まる「家の教会」です。(写真6)

元戦闘地域に広がるキリスト教

タイ国境、元戦闘地域に新たにできた道沿いを行くと、周辺の景色から浮き上がる白い建物が見えました。小さなプロテスタント教会です。こんな森の中にも教会があるとは!よく見るとハングル文字が書かれています。以前はアメリカ、カナダ、オーストラリアなど欧米の宣教団の支援によって建てられた教会が多くありましたが、近年は韓国からの建物支援が目立ちます。(写真7)

1999年武力紛争が完全終結してから、タイ国境沿いの元ポル・ポト派の支配地域





写真8 / 建設中の教会で日曜礼拝をまもる



写真9 / 牧師一家4人は、教会の脇にあるこの牧師館に住む

は、他の地域に10年以上遅れて道路や電気、公共施設等のインフラ整備が始まり、人の移動も急増しました。このような遠隔地域で次々と教会が立ち、信徒も増えていきます。

自分たちで教会を建てる

そのような地域の一つ、カンボジア北端オドーミエンチェイ州のはずれ、元ポル・ポト派の最後の支配地域に教会があると人づてで聞き、訪問しました。幹線道路から奥に入ってしばらく行った村道沿いにありました。

3年前から始まったこの教会の建設計画は、今もまだ進行中です。教会建設には外部支援に頼るところが多い中、この教会

は自分たちでコツコツと資金を貯め、ある程度まとまると、木材と労力を持ち寄って段階的に建設作業を続けています。(写真8)(写真9)

この教会の2人の牧師、そして信徒のほとんどは、元ポル・ポト派兵士かその家族です。牧師と3人のリーダーで手分けして周辺の14村を頻りに回り、熱心に伝道活動をしています。5年前に3家族から始まった教会には、今では300名を超えるメンバー(うち約半数が子どもたち)が連なっているそうです。

債務返済に苦しむ人が増える中、牧師の発案で、教会員有志で貯蓄・低利子貸し出しグループを立ち上げました。更に同地域にある他の教会とも連携して共同基金をつくり、2年半の間に5000ドルも貯まりました。この地域出身で、元NGOスタッフであった牧師の経験を活かした活動です。

人びとが求めるもの

武力紛争が終結し、近年急速な経済成長を続けるカンボジアで、新たに様々な課題が生まれ、格差や人権問題も拡大しています。人々が多忙になり、既

存の相互扶助関係が不安定になる中、お互いの直面する苦難の解決のために祈り合い、助け合う共同体が求められています。(写真10)人々のニーズや課題が変化する中で、カンボジアのキリスト教界もその使命と役割が問われているようです。

(※注1) 1975年4月から3年8か月間、政治グループ、クメール・ルージュの指導者ポル・ポトが政権を取り、農村をベースにした共産社会の急速な実現を目指した。その間、人口の5人に1人が殺害、飢えや病気などで死亡したといわれる。1979年1月にベトナムの支援を受けた新たな政権が樹立されると、タイ国境沿いなどに移動し、1991年和平協定が結ばれた後も反政府武力闘争を続けた。

<参考文献>
石澤良昭(2002)「カンボジアの伝統社会とキリスト教」
寺田勇文編『東南アジアのキリスト教』メコン。
宇井志緒利(2017)「内戦と虐殺の歴史を経て—カンボジアの社会変化とキリスト教」福音と世界2017-7, 12-17.
Thyu, J.K., Hoershlmann, H. and Juergensen, A. (2012) "Cambodia." *The Ecumenical Review*, 62(2), 104-124.

宇井志緒利(うい・しおり)
立教大学キリスト教学研究科特任教授
南山大学外国語学部卒業、カリフォルニア大学バークレー校社会学修士課程修了、2007年名古屋大学医学系研究科博士課程修了(医学博士)。NGOアジア保健研究所(AHI)職員、世界教会協議会(WCC)カンボジアプログラム調整役を経て2015年より現職。専門は国際保健・開発、アジアの市民社会。著書に『Ethnography Unbound』(共著、カリフォルニア大学出版会、1991年)、『非戦・対話・NGO』(共編著、新評論、2017年)他。

写真10 / 力強い祈りは、教派を問わずカンボジアの教会の特徴

アジ研的
●レストラン探訪●

福清菜館 福来園

文・写真 / 四日市康博(立教大学文学部史学科准教授・アジア地域研究所)



(左、上) 龍高番薯丸

海蠣抱蛋

おなじみの「池袋唐人街(チャイナタウン)」こと池袋北口であるが、数多く並ぶ中国東北料理と四川料理の店々に混じって閩菜と呼ばれる福建料理の店がある。閩とは福建地方のことを指すが、福建の語源となった福州と建陽がいずれも閩江の流れに沿って位置していることに因んでいる。福建料理といえば中国八大料理のひとつと言われるが、ここ「福清菜館 福来園」は福州市の近郊、福清の料理を扱うレストランということである。となると、池袋はあるが、日本全体でもかなり珍しい店なのかもしれない。



福清を流れる龍江沿いの風景(2011年3月)

この名物料理のひとつが「龍高番薯丸」。福清の龍高地区の番薯丸(サツマイモ団子)だ。どれだけ昔からあるのか定かではないが、福清の農村では冬至にこの料理を食べたのだという。私もしばしば陶磁器の古窯調査で中国の奥田舎や山奥に入ることがあるが、そういう場所の料理は素朴でも大変美味しい。福清には2011年の春に東張窯という天目茶碗を焼く窯跡の調査で訪れたが、やはり牧歌的な風景の広がる穏やかな場所であった。龍高番薯丸も素朴な見た目のサツマイモ団子...ではないのだ。中にはなんと青菜や豚肉、海鮮などから成る餡が入っているのであった。なかなかやってくる。

もうひとつの名物料理は牡蠣料理である。日本で食べられている牡蠣よりもかなり小ぶりな牡蠣で、オムレツや焼きそばなどにたっぷりに入れて食べる。こちらは福清の名物料理というよりも福建沿岸部ならどこでもあるポピュラーな料理

である。私がこれを初めて食べたのはもう15年前になるが、廈門のコロン島であった。福清菜館 福来園でも例に漏れず、海蠣抱蛋(牡蠣オムレツ)やそのほか様々な牡蠣料理を食べることができる。まさか池袋に居ながらにして、再び福建名物の牡蠣料理を食べることができるとは。ちなみにこのような牡蠣オムレツ、福建だけではなく、台湾やベトナム、タイ、シンガポールでも食べられている。海城アジアの牡蠣オムレツ・ネットワークの一端に池袋もリンクしていたのだ。さすが、我らが混沌タウン池袋である。

昼時はランチを目標とした客で賑わうが、客層には中国人も多く、オーダーの際には中国語が飛び交う光景もめずらしくない。もちろん、日本語も通じるので心配は無用。池袋で閩菜を存分に味わってほしい。

福清菜館 福来園

〒171-0021 豊島区西池袋1-43-9アミューズ池袋1F
TEL03-4530-9161
池袋駅(北口) 徒歩3分
営業時間 / 11:00~15:00、17:00~23:30 (年中無休)



店頭の様子